
カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

永遠なる自由の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～

【Zコード】

Z2376Z

【作者名】

永遠なる自由の剣

【あらすじ】

ヴァンガードの世界に遊戯、十代、遊星、遊馬が迷いこんだ！
ヴァンガードと遊戯王のクロス物語です。

出会いと始まり

そう遠くない未来のお話、カードゲーム人口は数億人を越え今はカードゲームを専門とした学園まで存在していた。学園の名前はファイトアカデミア、ヴァンガードを専門とした学校である。

この学園に通う一人の少年がいた。

彼の名前は先導アイチ、櫂といつ最強のファイターとファイトすることを夢見る少年である。

(今日は良いことが起こう! ううな気がする……)

そう思いアイチは教室へと急いだ。

教室に着くといつものメンバーがいた。

「おはようございますお兄さん……」

「おはようカムイ君!」

アイチにカムイと呼ばれたこの少年は葛木カムイ。

「やけに上機嫌じゃない? アイチ」

次に話し掛けて来たのは戸倉ミサキ。

この一人はアイチと同じチーム、Q4のメンバーである。

「なんか今日は良いことが起こう! ううな気がして……」

「ぐだらんイメージだな…………」

「権君…………」

アイチたちが話していた場所に一人の青年が現れた。彼の名前は権トシキ、この世界のヴァンガードチャンピオンと双璧とも呼ばれていてアイチたちと同じQ4のメンバーである。

「権のやろー、頭にくるな！」

「カムイ君落ち着いて…………」

怒り狂つたカムイをアイチが止めていると、

ガツシャーン！

校庭の方からすごい音がした。

「な……なんだ！？校庭の方からか！？」

「行つてみよー！」

「待つて、アイチ！」

権を除く3人は校庭を目標して駆けていった。
3人が校庭に着くとそこは土煙が上がっていた。

「ゲホゲホ…………何が起きたんだ？」

「わからないけど氣をつけてカムイ君」

「大丈夫ですよ兄さん」

カムイがそういつた時、土煙の向こうから人が4人現れた。

「遊星……」とはじこだ？」

「わからない……俺らの世界ではないみたいだな」

遊星と呼ばれたその人が答える。

「な……人が出て来たあ！？」

カムイは驚きアイチの後ろに隠れる。

土煙が晴れるとそこにはどこかの制服を着て、首から見たこともないネックレスをしている青年と先ほど遊星と呼ばれたらしきクールだがいびつな髪型をしている青年、何らかの鍵らしきものを首から下げている男の子、赤いブレザーを着ている青年が立っていた。

「貴方方は一体誰ですか…………？」

アイチが恐る恐る聞いた。

すると先ほど遊星と呼ばれた青年が答えた。

「俺の名前は不動遊星だ……俺たちは世界が崩壊するとアポリアから告げられ、その未来を代えるためにDホイールに乗つて遊戯さん、十代さん、遊馬さんを迎えて時代を越えていたんだ。」

「ちょっと待て……時代を越えて来た？そんなバカな話しあるのか？」

ミサキが質問した。すると、遊星は手袋を外し癌を見せて話した。

「」の竜の痣の力で時代を越えられるんだ。そして赤き竜に導かれて来てみたらこんな場所についたんだ」

「そんなことがあるんですか……」といひで「リストとは何ですか？」

アイチは疑問をぶつけた。すると鍵のようなペンドントをした少年が答えた。

「遊戯王カードで戦う決闘者の事だ！お前ら知らないのかよ！？ほら……」

そういうその少年はデッキケースからカードを取り出したがびっくりした声を上げた。

「俺のデッキが訳のわからないカードになっちゃった……」

「な！？」

残りの3人もデッキを確認してみると全員のカードも見たことがないカードになっていた。

「なんだこのカードは……」

「ヴァンガードを知らないのか？」

「……」

4人は驚きの声を上げた。

「ルールを教えてやるよ……」

「権君」

権がいつのまにかアイチの横に立っていた。

「権君戦つの？」

「ああ、あいつらの持つているカードが気になる…………それに話すより簡単にわかりあえる」

権がそういうと見たこともないネックレスをした青年が答えた。

「面白そうだな、四の五の言ひより分かりやすい…………良いゼテューハルだ」

「僕も戦つてみたい！」

「私も興味がわいた。私も戦いたい」

「俺様もだ」

アイチ、ミサキ、カムイも戦いたいと言つた。

「」（）ちも4人だしちょうどいい、よろしく頼む

こうしてアイチたちQ4と遊星ら4人によつてファイトをすることになったのだった。

出会いと始まり（後書き）

次回は遊戯ＶＳ櫂君です
最強同士の戦いです

最強VS最強 前編

30分後、遊星たちは『テック』を見て個々の能力を覚えた。そして櫂と見たこともないネックレスをした青年とのファイトが始まろうとしていた。

「俺の名前は武藤遊戯… あ…面白~い勝負をしようぜー。」

「俺の名前は櫂トシキだ… お前は初心者だから説明しながら戦つてやるよー。」

お互に自己紹介をし握手をしてファイトを始めようとしていた。

「よし！始めるぞー！イメージしろ… 今の俺たち一人は地球上によく似た惑星『クレイ』に現れた靈体だ… このか弱い存在の俺たちに与えられた能力がふたつある… ひとつは『コール』！この惑星の住人やモンスターたちを呼び寄せる能力だ！ 俺たちが呼び寄せる事ができるのは契約したものたち…」

そう言い櫂は『テック』を手に持ち話を続けた。

「お互いの『テック』に集められたカードたちだけだ！」
そして櫂は『テック』を置いた。

「そしてふたつめは靈体である自分を呼び寄せたモンスターらに憑依させる能力！『ライド』！！そしてライドした俺たちを先導者…『ヴァンガード』と呼ぶ！先ずはグレード0のカードを一枚選ん

でそれを場に伏せな！」

櫂はデッキからカードを一枚選んで伏せた。遊戯も同じく一枚選び置いた。

「最初の俺たちが最初にライドできるのはこのグレード0だけだ

「なるほどな」

「この伏せたカードが開かれたらそれは他の誰でもない自分自身となる！自らがヴァンガードとなつて契約したものたちを率いて戦うんだ！さあシャッフルしたデッキからカードを5枚引きな、それが俺たちが呼び寄せる準備の整つたものたちだ」

櫂はシャッフルしたデッキからカードを引きながら言つ。遊戯も同じく引く。

「よし！同時にこのファーストヴァンガードを開いたらゲームスタートだ！行くぞ！」

「来な！」

櫂と遊戯は伏せたファーストヴァンガードを開きながら同時にこういふ

「「スタンダップヴァンガード！..」」

「俺はアンバードラゴン晩にライド！」

「俺は見習いの黒魔術師にライド！」

「これでお互いヴァンガードとして惑星クレイの地に立つた！先ず

は俺の先攻だ…カードを一枚引く!」

そう言い権はカードをデッキから引いた。

「自分のターンには一度だけヴァンガードを更なる上級グレードにライドする事ができる…『ライドフェイズ』がある!」

権は手札からカードを一枚選び、ファーストヴァンガードの上に置いた。

「俺はこのカードにライドする!!ライド・ザ・ヴァンガード!!!グレード1、アンバードラゴン^{デイライト}白日だ!…そしてアンバードラゴン^暁のスキルを発動する!デイライトがドーンにライドしたとき、デッキからアンバードラゴン^{黄昏}を一枚手札に加えデッキをシャッフルする事ができる…そしてアンバードラゴンデイライトのスキル!ソウルにアンバードラゴンドーンが有るならヴァンガード時だけだがこのユニットのパワーを+2000!」

元々のパワーが6000だったデイライトは8000となる。

「さらにヴァンガードは自身のグレード以下のカードをコールして従える事ができる…このカードを『リアガード』と呼ぶ!」

権はヴァンガードの後にカードを置いた。

「コール・ザ・リアガード!!!グレード1のアンバードラゴンデイライト!!さらにデイライトのスキル!デイライトがリアガードにコールされたとき、手札のグレード3を捨てデッキからアンバードラゴン^{イクリプス}蝕を手札に呼べる!」

権はデッキからアンバードラゴンイクリプスを手札に加えた。

「これで俺の自陣には2体！アタック……は先攻した最初のターンはできない、ここで俺のターンを終了する」

「俺のターン！」

遊戯はデッキからカードを引いた。

「俺はこのカードにライドするぜ！ライド・ザ・ヴァンガード！！！ブラックマジックカーテン！」

遊戸も見習いの黒魔術師の上にカードを置いた。

「見習いの黒魔術師のスキル！ブラックマジックカーテンがこのコマにライドしたときデッキからブラックマジシャンを手札に加える！そしてブラックマジックカーテンのスキル！ソウルに見習いの黒魔術師が有るときパワー + 2000だ！」

ブラックマジックカーテンの攻撃力も6000なので櫂のアンバードラゴンティライトと同じ攻撃力となつた。

「さりに」ホール・ザ・リアガード！！！ブラックマジックカーテン！このカードは櫂のティライトと同じようなスキルを持つ……」

「何だと？」

「手札のグレード3を捨てデッキからカオスマジシャンズドラゴンを手札に加える……」

遊戸も櫂と同じくデッキからカードを手札に加えた。
それを見ていたアイチが

「凄い……遊戯さん初めてなのにもうリッシュキを使っこなしてね……」

「当たり前だろ？遊戯さんは俺らの世界の初代デュエルチャンピオンなんだから！」

「君は？」

「俺の名前は遊城十代、よろしく

十代と名乗った少年が握手を求めてきた。

「はじめまして！僕の名前は先導アイチです。遊戯さんってそんなに強い方だったんですね！」

アイチは十代と握手をし、率直な感想を述べた。

「もちろん！あの人はどんな強敵にも屈指す戦い抜いてきた凄い人なんだぜ！」

アイチは十代の話を聞いて思つ。（今のは本当なら櫂君が満足して戦える相手だね）と。

「まさか同じ能力対決になるとはな……2体でアタックされたら俺は歯が立たない……お前の方が圧倒的に有利だが……アタックするかい？」

「おう……」

「よし良いぜ！攻撃するコニットをレストし宣言しなー！」

遊戯はユニットをレストしながら宣言する。

「リアガードのブラックマジックカードでヴァンガードをブースト…！…ブラックマジックカードでアタック…！」

遊戸の攻撃が櫂にヒットした。

「やられたよ…お前のアタックは置いたにヒットした…」ヴァンガードがアタックするとき、デッキの一番上を確認して手札に加える事ができる…そして確認したカードがトリガーコニットだった場合、そのトリガーの力を自陣のユニットに与える事ができる…さらにヴァンガードに攻撃がヒットするとデッキのカードが1枚…契約が解除戯れ言でヴァンガードの元から去っていく…まるで危険を感じて逃げ出したようだな…アタックされてめくつたカードがトリガーコニットの場合でもそのトリガーの力を使うことができる…そして…契約を解除されたものが6体を越えたとき…すべてのカードとの契約は解除され俺たちは靈体に戻り消滅する。つまりそのプレイヤーの敗けだ…理解できたな？授業は終わりだ！行くぞ！」

「来な…」

ここから櫂と遊戸の本当の戦いが始まるのだった。

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする…アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイライトがあるときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となつた。さらに櫂は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをホール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！！」

「ノーガード、ダメージトリガーチェック……ゲット…ドロートリガーヴァンガードにパワー+5000、そしてドロー…」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！」のコニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイライトのブースト…！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック…！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイライトのブーストと皿身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

櫂のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック…トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかつた。そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は…こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本氣で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！…さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト！」

そういって遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有ると相手のリアガードを2体退却させる…ブラックマジック…！」

權の場のラーゴアアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

（なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持つてるな）

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気見せてみろ！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがあるときカオスマジシャンズドラゴンのパワー + 200 0だ」

もともとのパワーは10000なので12000となる。

「せりに手札を一枚捨てテックからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はテックからカオスマジシャンをコールする！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがないとパワー-5000だ…そしてカオスマジシャンでアタック…！」

「ガーディアンコール！ブレイジングアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだと…？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やつぱり櫂君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かに…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！－ツインドライブ、ファースト…ゲットクリティカルトリガー！セカンド…スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシャンズドラゴンとカオスマジシャンに、そしてカオスマジシャンズドラゴンにクリティカル＋1だ！」

アタックはヒットし櫂のテッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシャンでアタック！－！」

「ノーガードだ…」

「これで櫂のターンは終了だ」

「マイターン、スタンドアンドドロー－俺はアンバードラゴンイクリップスにライド！イクリップスのスキル－ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー＋1000だ！」

イクリップスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアーキドラゴン、バーをホール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー＋5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシャンにアタック！－エターナルフレイム！－」

「ノーガード」

「オーバーロードのアタックがヒットしオーバーロードがスタンディングした。」

「な……シリーズアタック！？クソ」

「再度オーバーロードでアタック！エターナルフレイム！！」

「エポナでガードする！！」

「オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが櫂の攻撃は止まらない。」

「アンバードラゴンディライトのブースト！…アンバードラゴンクリップスでアタック！…」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト…」

「一枚目にはトリガーはなかった。」

「セカンド…ゲットクリティカルトリガー！イクリップスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える！」

「遊戯のダメージゾーンにカードが2枚送られた。」

「バーのブースト！…アクスでアタック！…アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー + 3000だ！」

アクスのータルパワーが26000となる。

「高過ぎるー、ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となつた。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！ カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！ カウンター ブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー + 10000、クリティカル + 1だ！ だがこのスキルはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十分だ！ さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコール！ そしてアタック！ カオスマジシャンズドラゴンでアタック！」

このアタックがヒットすると櫂は敗けてしまつのに櫂は焦らなかつた。

「バリイで完全防御だ！」

「ヒットしないだと！ ？ シンドライブ… フースト… セカンド、ゲットクリティカルトリガー！ 効果はすべてブラックマジシャンへ！」

ツインドライブで引いた一枚目はグレード3だった。

クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となつた。

「ブラックマジックカーテンのブースト…！ブラックマジシャンでアタック！！」

「ラクシャでガードだ！」

「ターン終了だ…」

遊戯はこのターンで櫂を倒せなかつた。そして遊戯はもう次のターンは来ないと悟つた。

「ファイナルターン！」

「何…？」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思つた。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド！そしてジョカをコール！そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブースト！相手ユニットを1体退却させる！」

遊戯の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル！相手ユニットが退却したときパワー+3000だ！」

「何だと…？」

「ドラゴンクオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンディライトのブースト！…ブレイジングフレアドラゴンでアタック！…」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！…これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…ゲットドローントリガー！セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！…そして1毎夜ドロー…そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかつた。

「ノーガード…」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！…デュアルアクスボンバー！…」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は櫂に敗北してしまつたのだった。

「久しぶりに面白いファイトだったぜ……遊戯、ルームをしつかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ

「もちろん絶対に強くなつてやる…そして櫂、君と戦い必ず勝つてみせる！」

そういうお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあいつは一体何者何だ！？それにしてもすごかつたな！今のを見たら俺もやりたくなつてしまつたぜ！なあアイチ、俺とファイトしよう！」

十代が興奮しきつてアイチにそつ告げた。
アイチは戸惑つたが

「 もううんだよ…たあファイトしよう！」

そういうて二人は櫂と遊戯が戦つた場所へと移動するのだった。

そして場所に着きテッキを置いて叫んだ。

「 「スタンダップヴァンガード…！」

最強V/S最強後編（後書き）

次回はアイチV/S十代です。
コニックの設定どうじよつかな（（（（（・・・）

「マイターン、ドロー…俺はアンバードラゴンダスクにライドする…アンバードラゴンダスクのスキル！ソウルにアンバードラゴンデイライトがあるときパワー+1000だ！」

アンバードラゴンダスクのパワーが10000となつた。さらに櫂は「ラーヴァアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンをホール！そしてフレイムエッジドラゴンでヴァンガードをアタック！！」

「ノーガード、ダメージトリガーチェック……ゲット…ドロートリガード…ヴァンガードにパワー+5000、そしてドロー…」

「フレイムエッジドラゴンのスキル！」のコニットのアタックがヒットしたときソウルチャージできる！ソウルをチャージし、次だ！アンバードラゴンデイライトのブースト…！アンバードラゴンダスクでヴァンガードをアタック…！ダスクのスキル！ダスクがヴァンガードをアタックするとき、パワー+2000される！」

ダスクはデイライトのブーストと自身のスキルでトータルパワー18000となる。

「ノーガードだ！」

櫂のアタックがヒットし、カードが1枚ダメージゾーンに送られた。

「ドライブトリガーチェック…トリガー無しだ…ターンを終了する」

まだユニットが残っていたがパワーが足りずアタックできなかつた。そして遊戯のターンになる。

「俺のターン！強いな君は…こんなに熱くなれた戦いは久しぶりだぜ！さあ、俺も本氣で行くぜ！俺の最強の僕！ライド！ブラックマジシャン！…さらにコール！ブラックマジシャンガール！ブラックマジシャンのスキル！カウンターブラスト！」

そういって遊戯はダメージゾーンのカードを2枚裏返す。

「ソウルに見習いの黒魔術師、ブラックマジックカーテンが有ると相手のリアガードを2体退却させる…ブラックマジック…！」

權の場のラーゴアアームドラゴン、フレイムエッジドラゴンが退却させられた。

（なかなかやるな。しかもまだなにか隠し持つてるな）

「さらに行くぜ！リアガードのブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンをソウルに異動することでこのカードはスペリオルライドできる！俺の新たな仲間！カオスマジシャンズドラゴンにスペリオルライド！」

「ほう？なかなか面白いな！それでこそ燃える！お前の本気見せてみろ！」

「カオスマジシャンズドラゴンのスキル！このカードはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがあるときカオスマジシャンズドラゴンのパワー + 200 0だ」

もともとのパワーは10000なので12000となる。

「せりに手札を一枚捨てテックからグレード2以下のマジシャンユニットをコールできる！俺はテックからカオスマジシャンをコールする！カオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンが有るときパワー+2000だ！」

カオスマジシャンのパワーも10000であるためパワーは12000となる。

「だがカオスマジシャンはカオスマジシャンズドラゴンがないとパワー-5000だ…そしてカオスマジシャンでアタック…！」

「ガーディアンコール！ブレイジングアドラゴンをコール」

「アタックが通らないだと…？」

遊戯は驚きの声を上げた。

「自分の手札から一度だけユニットをコールしてヴァンガードを守る事ができる！ガーディアンとしてコールされたユニットはクローズステップ時にドロップゾーンに送られる」

「やつぱり櫂君はそこでガーディアンを教えるんだね…」
アイチが自分の時の事を思いだし呟いた。

「実戦の方が分かりやすいだろ…」

「確かに…ならガーディアンのガード力を越えるパワーでアタックすればいいんだろ！カオスマジシャンズドラゴンでヴァンガード

をアタック！－ツインドライブ、ファースト…ゲットクリティカルトリガー！セカンド…スタンドトリガーだ！パワーをカオスマジシャンズドラゴンとカオスマジシャンに、そしてカオスマジシャンズドラゴンにクリティカル＋1だ！」

アタックはヒットし櫂のテッキからカードが2枚ダメージゾーンに置かれた。

「さらにカオスマジシャンでアタック！－！」

「ノーガードだ…」

「これで櫂のダメージは4となつた。

「これで俺のターンは終了だ」

「マイターン、スタンダンドドロー－俺はアンバードラゴンイクリップスにライド！イクリップスのスキル－ソウルにアンバードラゴンダスクが有るときパワー＋1000だ！」

イクリップスのパワーが11000になる。

「さらにドラゴニックオーバーロード、デュアルアクスアーキドラゴン、バーをホール！ドラゴニックオーバーロードのカウンターブラスト！オーバーロードにパワー＋5000だ！」

櫂は一気に攻撃を仕掛けた。

「オーバーロードでカオスマジシャンにアタック！－エターナルフレイム！－」

「ノーガード」

「オーバーロードのアタックがヒットしオーバーロードがスタンディングした。」

「な……シリーズアタック！？クソ」

「再度オーバーロードでアタック！エターナルフレイム！！」

「エポナでガードする！！」

「オーバーロードの攻撃は防がれてしまった。だが櫂の攻撃は止まらない。」

「アンバードラゴンデイライトのブースト！…アンバードラゴンクリップスでアタック！…」

「ガードはしない」

「ツインドライブ、ファースト…」

「一枚目にはトリガーはなかった。」

「セカンド…ゲットクリティカルトリガー！イクリップスにクリティカル+1、アクスにパワーを与える！」

「遊戯のダメージゾーンにカードが2枚送られた。」

「バーのブースト！…アクスでアタック！…アクスのスキル、相手

リアガードが2体以下のときパワー + 3000だ！」

アクスのータルパワーが26000となる。

「高過ぎるー、ノーガードだ」

遊戯のダメージが5となつた。

「あと1ダメージだな……俺のターンは終了する」

「俺のターンだ！ カオスマジシャンズドラゴンの最後のスキル！ カウンター ブラスト！」

ダメージを3枚裏返した。

「パワー + 10000、クリティカル + 1だ！ だがこのスキルはソウルにブラックマジシャン、ブラックマジシャンガール、ブラックマジックカーテンがありダメージが4以上ではないと使えないが十分だ！ さらにブラックマジシャン、ブラックマジックカーテンをコール！ そしてアタック！ カオスマジシャンズドラゴンでアタック！」

このアタックがヒットすると櫂は敗けてしまつのに櫂は焦らなかつた。

「バリイで完全防御だ！」

「ヒットしないだと！ ？ シンドライブ… フースト… セカンド、ゲットクリティカルトリガー！ 効果はすべてブラックマジシャンへ！」

ツインドライブで引いた一枚目はグレード3だった。

クリティカルトリガーの能力でブラックマジシャンの攻撃力は14000となつた。

「ブラックマジックカーテンのブースト…！ブラックマジシャンでアタック！！」

「ラクシャでガードだ！」

「ターン終了だ…」

遊戯はこのターンで櫂を倒せなかつた。そして遊戯はもう次のターンは来ないと悟つた。

「ファイナルターン！」

「何…？」

ファイトを見ていた十代は驚きの声を上げ、アイチたちは遂にかと思つた。

「ブレイジングフレアドラゴンにライド！そしてジョカをコール！そしてブレイジングフレアドラゴンのソウルブースト！相手ユニットを1体退却させる！」

遊戯の場のブラックマジシャンが姿を消した。

「そしてジョカ、ブレイジングフレアドラゴンのスキル！相手ユニットが退却したときパワー+3000だ！」

「何だと…？」

「ドラゴンクオーバーロードのアタック！」

アタックがヒットしダメージチェックに入る。

「ゲット、スタンドトリガーだ！パワーをヴァンガードに、ブラックマジックカーテンをスタンド」

「アンバードラゴンディライトのブースト！…ブレイジングフレアドラゴンでアタック！…」

「ブラックマジックカーテン、エポナでガード！…これで防げるはずだ！」

「ツインドライブ、ファースト…ゲットドローントリガー！セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果のすべてはアクスに！…そして1毎夜ドロー…そしてデュアルアクスアークドラゴンでアタック！！」

もう遊戯にはガードできるカードがなかつた。

「ノーガード…」

「双斧に刻まれし恐怖、絶望……永の苦痛に悶えて眠れ！…デュアルアクスボンバー！…」

デュアルアクスのアタックがヒットし、遊戯のダメージが7となり遊戯は櫂に敗北してしまつたのだった。

「久しぶりに面白いファイトだつたぜ……遊戯、ルームをしつかり

覚えたらお前は今よりもっと強くなる…その時が楽しみだ

「もちろん絶対に強くなつてやる…そして櫂、君と戦い必ず勝つてみせる！」

そういうお互いに握手をした。

「あの遊戯さんに勝つ何てあいつは一体何者何だ…?それにしてもすごかつたな!今を見たら俺もやりたくなつてしまつたぜ…なあアイチ、俺とファイトしよう!」

十代が興奮しきつてアイチにそつ告げた。
アイチは戸惑つたが

「もちろんだよ…たあファイトしよう!」

そういうて二人は櫂と遊戯が戦つた場所へと移動するのだった。

そして場所に着きテッキを置いて叫んだ。

「「スタンダップヴァンガード!」」

最強V/S最強後編（後書き）

次回はアイチV/S十代です。
コニックの設定どうじよつかな（（（（（・・・）

HERO VS 光の騎士団（前書き）

E-HEROがチートです（笑）

HERO VS 光の騎士団

十代とアイチのファイトが始まった。

「ばーぐるにライドします」

「俺はハネクリボーにライドするぜ！よろしくな、ハネクリボー！」

（クリクリー）

十代の問いかけにまるでハネクリボーが答えているように思えた。

その光景を見ていた櫂は驚く。

（まさかアイツもあの力を？…………まさかな）

「僕の先攻です。ドローー！僕はマロンにライドします！そしてばーぐるのスキル！」

ソウルにあつたばーぐるがリアガードサークルにコールされる。

「ばーぐるは他のロイヤルバラディンがライドしたとき、リアガードサークルにコールされます。ターンエンドです」

「よし！俺のターンだな。ワクワクが止まらないぜ！行くぜ！俺はE-HERO フュザーマンにライド！そしてハネクリボーのスキルだ！ハネクリボーはE-HERO にライドされたとき、手札に戻す事ができるー」

「そんなスキル聞いたことないぞ！？」

Q4のメンバーは驚いた。

無理もない、今までにライドされたカードが手札に戻るカードなど存在していないのだから。

「後衛にE—HERO バーストレディをコール！そしてブースト！—フェザーマンでアタック！」

フェザーマンとバーストレディの攻撃力は7000なので合計14000となる。

「ドライブチェック！トリガーはないぜ」

「ダメージチェックです……」

アイチはダメージ食らつた。

「僕のターン！僕はふるうがるを『ール！』

ピンク色の可愛らしいハイドックがコールされた。

「さらにはーぐがるのスキル！テッキから未来の騎士リューをコールします。そしてリューのカウンターブラスト！」

アイチはばーぐがる、リュー、ふるうがるをソウルに送る。そしてアイチは高らかに宣言する。

「立ち上がり！僕の分身！ブラスターブレード！！」

ロイヤルパラディン光の剣、ブラスターブレードが姿を現す。

その姿は凜々しく、十代のHEROを圧倒するプレッシャーを放つていた。

「すげえ、すげえよ！アイチ！カッコいいぜー。」

十代は初めて見るブラスター刃に感動していた。

「ブラスター刃の後衛についんがるを『ホール！』

ブラスター刃の相棒、ういんがるがホールされる。

「ういんがるのブースト！ブラスター刃でアタック！さらにういんがるのスキル、ういんがるはブラスター刃をブーストしたとき、ブラスター刃にパワー + 4000 します！」

これでトータルパワーは 19000 となる。

「ノーガードだ！」

「ドライブチャック！トリガーはなし……」

「俺のターン！アイチがカッコいいの見せてくれたからな俺も見せてやるよ！E HERO バブルマンにライド！そしてバブルマンのスキル！カウンター ブラスト！だ！手札からカードを 2 枚捨て デッキからカードを 2 枚ドロー！」

「手札増強……」

「そして俺はドロップゾーンに送られたネクロダークマンのスキル

を発動！ネクロダークマンがドロップゾーンにあるとき一度だけグレード3にスペリオルライドできる！」

「…………？」

このスキルにはさすがに全員驚いた。

ほとんどノーコストでグレード3になれるのだから。

「だがネクロダークマンはデッキに1枚しか入れられず、しかも1度しか使用出来ないけどな……これが俺のフェイバリットカードだぜ！こい！E-HEROネオス！！」

ネオスは十代が数々の敵と戦ったときに十代と共に戦い抜いた十代の切り札。

「手札からE-グランモールをコール！そしてグランモールをソウルに送り、コンタクトフェュージョン！！俺はエクストラデッキより、E-HEROグランネオスにユニゾンライド！！」

「なー？」

「わりいわりい……お前らの世界にはないんだよな、こうこうの」

そういうと十代は説明してくれた。

「俺のユニゾンライドってこいつのはユニゾンコニッシュのライド条件をクリアしたときにエクストラデッキ、まあ今あるデッキ以外のデッキだ…そこからスペリオルライドできるんだ！俺はユニゾンライドの2つの方法の内の1つ、コンタクトフェュージョンを今やつたんだ

「十代は融合の使い手だからな」

遊戯がみんなに話す、十代は元の世界で融合という力で何度もペインチを切り抜けた。

「俺のはユニゾンだけど遊星と遊馬も、もちろん遊戯さんも方法は違つけど俺と同じことが出来るんだぜー！」

Q4のメンバーには驚きの連発である。
自分たちにもこの力が使えたら無敗に近いだろう。

そして櫂は考える

（ここに彼ら全員と戦いたい！）と。

「アイチー！ここからが本番だぜ！E—HEROのグラランネオスのスキル！相手コニットを1体テックに戻す！ういんがるをテックへ！」

「くつ……」

（強い！櫂君と同じくらい強い！けど勝ちたい！）

「バーストレイディのブースト！…グラランネオスでアタック！…

「ノーガードです」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド！ゲットヒールトリガー！ダメージを回復してパワーをグラランネオスに」

アイチのダメージが2となるが、十代のダメージは0、圧倒的にア

イチが不利である。

「ターンの終わりにグラランネオスはエクストラデッキに戻り、ソウルのネオスにライドし、グラランモールはデッキに帰る……ターンエンド！」

グラランネオスの姿が消え、ネオスに戻る。

どうやらコンタクトフュージョンは1ターンしか持たないようだ。

「僕のターン！ 降臨せよ、騎達の主！ ライド！ ！ 騎士王アルフレッド！ ！」

アイチの切り札にして騎士達の王、アルフレッドが姿を現す。

「ギャラティン、ぽーんがる、あるがるを『ホール！ そしてぽーんがるのスキル！ カウンターブラスト！ デッキからソウルセイバー・ドラゴンを手札に加えます。そしてソウルセイバードラゴンをコール！ 』

「お兄さんソウルセイバーをどうしてリアガードなんかに！」

「次にライドしてもリアガードが足りないからな……アタッカーを増やすためにコールしたんだがつ！」

櫂が解説をしてくれた。

「ソウルセイバードラゴンでネオスをアタック！」

「ノーガードだ！」

ダメージチェックにトリガーはなし。

「アルフレッド…！アルフレッドはリアガードのロイヤルパーティ
ンの数×2000がパワーに加算されます！」

よつて今のアルフレッドはパワー16000である。

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド！ゲットクリティカルト
リガード！クリティカルはアルフレッドへ！パワーはギャラティン！」

さらに十代に2ダメージが追加された。

「ギャラティン！」

「ノーガード」

これで十代のダメージは5、次を受けたら敗けである。

「おもしれえよアイチ！俺も答える！俺のターン！ノーエアハミング
バードを「ール！そしてコンタクトフュージョン…！」

先程同様、エアハミングバードがソウルに置かれ、エクストラデッ
キから

「E-HEROエアーネオスにユニゾンライド！！エアーネオスは
相手とのダメージの差×2000パワーアップだ！そしてエアーネ
オスでアタック！！」

「防ぎ切れない！」

「ツインドライブ！ ファースト… ゲットクリティカルトリガー！ セカンド！ ゲットクリティカルトリガー！ パワーは全てエアーネオスに！」

これでアイチのダメージも5になつた。

またエアーネオスは「デッキに戻り、ネオスだけが場に残つた。

「このターンで決めます！」

「受け立つぜ！」

「マロンをソウルセイバーの後衛にコール！ そしてアルフレッドのカウンターブラスト！ デッキからゼノンをコール！ ゼノンは「デッキの一番上を巡り、それがヴァンガードと同じグレードならスペリオルライドできる…！」

アイチは祈るように「デッキをめくる。
そして…

「聖なる竜よ、出でてその神秘な力を奮え！ ソウルセイバードラゴンにスペリオルライド…！ そしてソウルブラスト！ ソウルセイバードラゴン、ギャラティン、ゼノンにパワー+5000…！」

「アイチ！ お前は本当にすげえよ…！」

「これが僕の全開です。ギャラティンでアタック…！」

「悪いなアイチ！俺は敗けない。来い！相棒、ハネクリボーゲード！！ハネクリボーゲード！ガーディアンにコールされたとき、カウンターブラスト3と手札のE-HEROを2体捨てることで俺のヴァンガードはこのターンダメージを受けない！！」

「そ……そん……な……」

「あと少しだつたな」

結局ツインドライブでトリガーはなかつた。

「俺のターン！手札のN-フレアスカラベ、N-グランモールをコール！そしてコンタクトフェュージョン！！E-HEROマグマネオス！！マグマネオスはお互いのソウルのカード1枚につきパワー+1000だ！」

アイチのソウルは1だが十代は5枚、よつて6000パワーが上がり、もともとは11000なので17000になり、バーストレディのブーストで24000。アイチは防ぎきれずダメージチェックに入る。

「トリガーなし……僕の敗けです……」

「そんな落ち込むなよアイチ！お前はもつともつと強くなる。強くなつた姿を俺に見させてくれよ？」

「はいっ！！」

「ガツチャ！楽しいファイトだつたぜ！」

十代とアイチのファイトは十代の勝利で終わるのだった。

HERO VS 光の騎士団（後書き）

次回はミサキVS遊星で行きたいと思います

アイチと十代のファイトが終わり、次は遊星とミサキの番なのでお互いに「テッキをシャッフルしていた。

「俺の名前は不動遊星だ…「テッキはほしぐす」というクランを使つている」

「私は戸倉ミサキ、ほしぐす何て聞いたことないな…まあ前の一人みたいに強いんだろうけどね」

遊星とミサキは簡単な自己紹介をして「テッキからカードを一枚裏向きに置いて叫んだ。

「「スタンダップ→ヴァンガード…」」

「俺はスター・ライト・ロードにライアード…」

「私は神鷹一拍子にライアード…」

（スター・ライト・ロード…一体どんなスキルを持つているんだろ？
あんなドリゴン見たことない）

遊星がライアードしたコニットは白い体に白い羽を携えて体にはまだ星屑を纏っているドリゴンだった。

「スターダストによく似てるぜ」「

十代がスター・ライト・ロードをみていった。

「相手が何であれ、全力で行くよ！私のターン！ドロー、神鷹一拍

子のスキル！デッキの上からカードを5枚めぐり、その中に三田円の女神ツクヨミがあればライドできる……」

ミサキはデッキの上から5枚めぐりその中の1枚を手に取り叫ぶ。

「三田円の女神ツクヨミ！ライド！…そしてターン終！」

「俺のターン！俺はスピードウォリアーにライド、そしてスターライトロードのスキル！他のほしごすがこのユニットにライドしたとき、このユニットを手札に戻す！そしてスピードウォリアーのスクリー！スピードウォリアーが場に出たターンの終了時までスピードウォリアーの攻撃力は倍になる！」

スピードウォリアーのパワーは7000なので14000となる。

「スピードウォリアーでツクヨミをアタック！」

「ノーガード」

「ドライブチャック、ゲットドロートリガー！パワーをスピードウォリアーに、そして一枚ドロー！」

ミサキに1ダメージを『え遊星はカードを1枚引く。

「ターンarend」

（こいつやつぱり強い！）

「私のターン！三田円の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めぐりその中の半月の女神ツクヨミにライドできる…！」

上からカードをめぐり、その中のカードを手に取り微笑む。

「時の流れは止められない、月は必ず満ちていくもの！ライド、半月の女神ツクヨミーそしてツクヨミのスキル！ソウルに神鷹一拍子、三田川の女神ツクヨミがあるとセソウルチャージできぬ」

「デッキの上のカードを2枚半月の女神ツクヨミの下に置いた。

「そしてレッディアイをホールしてレッディアイでアタック！！！」

遊星のダメージゾーンにカードが1枚送られる。

「そしてツクヨミでアタック！！！」

「受けてやる！」

「ドライブチャック、トリガーなし… ターン終了！」

遊星のダメージが2となつた。

「俺のターン！俺はスタードライブドライバーにライド！！そしてチューナーユニット、ジャンクシンクロン、チューニングサポートーをホール！！」

「やるのか遊星！」

「やります遊戯さん！俺はジャンクシンクロンのスキルを発動！！！ジャンクシンクロンと星屑のユニット1体をソウルに送る！」

ジャンクシンクロンの姿が消え光の輪となる。

「ジャンクシンクロンはジャンクシンクロンとほじくずのコニッシュアーティストをソウルに送り、エクストラデッキのジャンクと船のつぶゴーットをホールまたはライドできる！…」

「な…！？」

「集いし星が新たな力を呼び覚ます！光さす道となれ！…現れる、ジャンクウォリアー！…！」

遊星のリアガードに紫色の戦士が現れた。

「これが俺の絆の力、シンクロユニットだ！そしてジャンクウォリアーのスキル、ソウルのジャンクと名のつくユニット1体につきパワー + 1000だ！」

ジャンクウォリアーのパワーは10000、ソウルのジャンクは1体なのでパワーは11000となる。

「さらにチューイングサポートーのスキル！チューイングサポートーがシンクロの素材となつたとき、デッキからカードを一枚引く。ジャンクウォリアーでレッドアイをアタック！…スクラップフィスト…！」

「ぐつ…！」

「スタードライブドラゴンのスキル！スタードライブドラゴンがアタックするときパワー + 2000だ！そしてアタック！」

「Eアラーマーでガード！」

「ドライブショック、ゲットスタンドトリガー！ジャンクウォリアーをスタンド…さらにパワー+、そしてアタックだ！スクランプファイスト！」

「ノーガード」

ミサキのダメージも遊星と同じことなった。

「私のターン！あんた凄いね、とても初めてとは思えないよ」

「そりゃ遊星は遊戯さんと同じデュエルチャンピオンだからな」

またまた十代の発言に驚かされるO4のメンバー達。

「ますます負けたくないなつたよ。私も行くよ！半月の女神ツクヨミのスキル！デッキの上からカードを5枚めぐりその中の満月の女神ツクヨミライドできる…！」

ミサキはカードをめくるが今回はなかった。
だが手札から

「その微笑みで世界を照らせ！ライド満月の女神ツクヨミ！ツクヨミの後衛にお天氣お姉さんみるくをコール、さらにオラクルガードイアンワイズマン、ジエミーをコール！そしてワイズマンでジャンクウォリアーをアタック！…」

ジャンクウォリアーがドロップした。

「みんなのゲースト！ツクヨミアタック！…」

「ノーガードだ」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…トリガーはなしだ。

「俺のターン！俺も行かせてもらひ。『トブリドライブ』をホール！」
「グレード3にライドしないか？そのままじゃツクヨミは敵わないよ？」

「俺の『テック』にはグレード3はない……」

「「「「「「えつ？」」「」「」「」「」

全員驚いた。グレード3がないとはほとどど勝てないと同じだからだ。

「『テック』にはない…『テック』にはな

「あやか？」

「あ、俺はさらにスターダストシャオロンをホール！そして『テブルドライブ』のスキル！こいつもジャンクシンクロン同様でこいつとほじぐのゴーリット一体をソウルに送る！そして！」

「遊星のHースだ！」

遊馬はまだ見たことがないので見たくてウズウズしている。

「集いし願いが新たなる星となる！光さす道となれ！…飛翔せよ、スター・ダスト・ドラゴン！…」

「これが…スター・ダスト・ドラゴン、遊星のHース…」

ミサキはスター・ダスト・ドラゴンの美しさに見とれてしまった。

「スター・ダストの後衛にマッシュ・ウォリアーをホール！そしてアタック！」

マッシュ・ウォリアーのパワーは7000、スター・ダスト・ドラゴンのパワーは10000なので17000となる。

「ノーガード」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…ゲット、ダブルクリティカルトリガー！効果は全てスター・ダストに」

ミサキのダメージが一気に5になつた。

（危なかつた…けど次は私が攻める！）

「私のターン！アマテラスをホール、その後ろにジェミニを！そしてツクヨミのスキル！カウンターブラスト2でデッキからカードを2枚引き、1枚をソウルに、そしてもう一度」

（これで十分）

「アマテラスでスターダストドラゴンをアタック！！」

「ノーガード、ゲットドロートリガー！手札を1枚増やしパワーをスターダストに」

「ツクヨミでアタック！！」

「ぐず手のかかしでガード！手札を1枚捨てて完全防衛」

「ツインドライブ、ファースト…セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果は全てワイズマンに！そしてワイズマンでアタック！」

「スターダストファンタムでガード！」

スターダストファンタムはクリティカルトリガーでシールドは1000。

「ターン終了」

「俺のターン！俺はセイヴアードラゴンとチューニングサポートアーマー！セイヴアードラゴンもチューナーコニッシュだ！」

遊星はまたシンクロをやるつもりなのだ。

「セイヴアードラゴンとチューニングサポートアーマーをソウルに送り、集いし星の輝きが新たな奇跡を照らし出す！光さず道となれ！！光らせよ！セイヴアースタードラゴン！…セイヴアースタードラゴンのスキル！ソウルにスターダストドラゴンがあるとき、パワー+1000！」

セイヴァースタードラゴンの攻撃力は11000なので12000となる。

「そして手札を一枚捨て、相手のコートと同じスキルを得る…」

「…な…!?」「…」

「サブリメイションドレイン！アマテラスのスキルをもらつ！ソウルチャージ、そしてデッキ確認！そしてスタードライブドラゴンをコール！セイヴァースタードラゴンのアタック！…」

「じょこりで完全防御！…」

ミサキはこのターンを防ぎ切ればなんとかなると思つていたが覆されてしまった。

「それを待つていたんだ！！セイヴァースタードラゴンのスキル！このユニットのアタックが相手のガーディアンのスキルでヒットしなかつたとき、カウンターブラスト3で相手のリアガードを全て退却させる…！」

「なんだつて…！」

ミサキのリアガードが全て退却してしまった。

「そしてツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットドロートリガー！効果はスタードライブドラゴンに！そしてスタードライブドラゴンでアタック！」

「サイキックバードでガード…」

何とか防ぎ切れたがミサキの手札にはグレード〇がほとんびだつた。
(「から勝つのは辛い……」)

「セイヴアースターデラゴンはターンの終了時にエクストラテック
に戻りスターダストドラゴンとなる。ターンエンド」

「私のターン！このターンで勝つ、メテオブレイクウイザード、コ
ロをホール！そしてアタック！」

しかし遊星はその全ての攻撃を防ぎ、ミサキのツインドライブでは
トリガーはこなかつた。

「俺のターン！クイックシンクロン、スターライトコードをホール
！そしてスターライトコードとクイックシンクロンをソウルに送り、
集いし星の輝きが新たな速度の地平へ誘う！光さす道となれ！！希
望の力フォーミュラーシンクロン！」

「遊星、このターンで決めるな

遊戯はファイトの終わりを悟り、櫂も同じく感じていた。

「フォーミュラーシンクロンのスキル！ヴァンガードがスターダス
トドラゴンのとき、このコニットをソウルに送り、集いし夢の結晶
が新たな進化の扉を開く！光さす道となれ！！アクセルシンクロ！
生来せよ！シューティングスターードラゴン！…」

どうやらこの世界にきて遊星はクリアマインドを発動しなくてもシ
ューティングスターを出せるようになつたようだ。

「シューディングスターードラゴンのスキル！カウンタークラスト2

でデッキの上からカードを5枚めぐりその中のチューナーユニットの数だけアタックがヒットしたときスタンドできる……だがツインドライブは失うけどな

そういうながら遊星はカードをめくる。

「テツキよ…… 答えてくれ…… 来た！」

遊星がめぐつたカードは全てがチューナーユニットだった。

（一方的じゃない……）

ミサキは軽く絶望する。

「シュー・ティングスター・ドラゴンでアタック！！スター・ダストミラージュ…！」

シュー・ティングスター・ドラゴンの攻撃力は11000、マッシュブウォリアーのブーストを受けてパワーは18000。

「ビクトリー・マイカー、ばにらではカード！」

（これでトリガーが来なければ…）

「ドライブチェック、ゲットクリティカルトリガー！スター・ドライブ・ドラゴンにパワー+5000！そしてアタック！」

結局ミサキは遊星のアタックを防ぎ切れず負けてしまったのだった。

「戸倉なかなか面白かった、またファイトをしよう」

「次は負けないからな…」

遊星とミサキは再戦の約束をして後の一人に場を渡すのだった。

星の絆VS占術魔法団（後書き）

次は遊馬VSカムイです。

希望ババペトロイヤド（前編）

遊馬がチートですが温かく見守つてやつてください（＊＊＊＊＊・）

希望ババトロイド

「よし！次は俺らだな、よろしくなえーっと、ひつじの「俺様はちつこくなんかない！…葛木カムイだ！」

カムイはちつこくの呼ばわりされて怒りだしてしまった。

「悪い悪い、俺は九十九遊馬だ！早くやめりやせ！」

「ねえ十代、遊馬ってどんなデッキを使うの？」

アイチが十代に問いかける。

「実は俺も知らないんだ……アイツが戦うのは初めて見るからな。だから何を使うかすっげえワクワクしないか？」

「そりなんだ、僕も楽しみだよ」

十代とアイツが会話をしている間に一人は準備を済ませたようだ。

「「スタンダップ、ヴァンガード…」」

「俺様はブラウコンガードにライド！」

「俺は希望の光ゼアルにライドだ！」

お互にファースト・ヴァンガードになり戦いが始まる。

「俺様のターンだな…俺様はブラウパンツァーにライド…そして
ブラウウンガードのスキル、ブラウパンツァーがこのユニットにライ
ドしたとき、デッキからブラウクリューガーを手札に加える」

カムイはデッキの中のブラウクリューガーを手札に加えデッキをシ
ヤツフルする。

「そしてブラウパンツァーのスキル、ソウルにブラウウンガードがあ
るならパワー+2000……よつてパワーは8000になる！タ
ン終了」

「俺のターン！俺はゴゴゴゴーレムにライド…！そして希望の光ゼ
アルのスキル！ゼアルは『アストラル』がライドしたときリアガ
ードに移動する……『ゴゴゴゴーレムの後衛に移動！ゴゴゴゴーレムの
パワーは7000…ゼアルでブーストしてアタック…！」

ゼアルのパワーは5000なのでパワーは12000となる。

「ノーガードだ」

「トリガーはなし、ターンエンド」

遊馬のアタックがヒットしてダメージを1受けた。

「俺様のターン！ブラウクリューガーに俺様ライド…！そしてジエ
ノサイドジャック、ダンシングウルフ、オアシスガールをコール！」

カムイの場に一気に3体のリアガードがコールされる。

「ジエノサイドジャックのカウンターblast、ジエノサイドジャ

ックの拘束を解除だ！そしてブラウクリューガーのスキル・ソウルにブラウパンツァーがあるならパワー + 1000

「ブラウクリューガーはパワー 9000、よってパワーは 10000 となる。

「オアシスガールのブーストでジェノサイドジャックでアタック！」

「ノーガード……ダメージトリガー、ゲットドロートリガー！パワーは「ゴゴゴ」に！そして一枚ドロー！」

「ダンシングウルフのブーストでブラウクリューガーアタック！！」

「ノーガード」

「ドライブチェック、トリガーなし」

「遊馬のダメージが 2 となりカムイのターンは終了した。

「こつから俺も全力だぜ、かつとビングだーー！俺！！手札からガガガマジシャンにライド！そして俺はコロボックリをコール！コロボックリをレストしてデッキからマツボックリをコール！」

（（（（（かつとビングってなんだろ？）））））

「マツボックリとコロボックリ、2 体のユニットでオーバーレイネットワークを構築！！エクシーザライド！NO.39 希望皇ホープ！！そしてマツボックリのスキル！コロボックリと共にオーバーレイユニットになつたときデッキからカードを一枚ドロー！」

「これが…遊馬のモンスター…」

Q4の他、遊戯たちも初めて見るので驚きを隠せない。

「オーバーレイユニットとなつたユニットはソウルに置かれるんだ！」

そういうながら遊馬はソウルを見せて元に戻した。

「さらにズババナイトを「ホール！ズババナイトのスキルで手札を1枚捨てて1枚引く！そして今捨てたカゲトカゲのスキル！自分の場にエクシーズユニットが存在するとき、一度だけドロップゾーンから「ホールできる！…カゲトカゲを「ホール！」

「「「「「まさか？」」「」「」「」

「カゲトカゲ、ズババナイト、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！…エクシーズ召喚！…N.O.・17リバイスドラゴン…！」

遊馬は2体目のN.O.・リバイスドラゴンをリアガードにホールした。

「リバイスドラゴンの後衛に「ゴーパー」を「ホール！そしてリバイスドラゴンでジェノサイドジャックをアタック！…」

ジェノサイドジャックが退却した。

リバイスドラゴンのパワーは9000、ゴーパーのブーストでパワー16000となつていた。

「そしてゼアルのブースト、ホープでアタック！！」

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットクリティカルト
リガード！効果は全てホープに！！」

「ダメージチェック、ゲットヒールトリガードダメージを回復、そ
して2枚目……」

（あのオーバーレイとか言つたチートだろ！何でこいつらこんなコ
ニットばつかしなんだよ！）

カムイは愚痴を心の中で吐き捨てた。

（けど勝つて見せる）

「俺様のターン！シユテルンブラウクリューガーに俺様ライド！！
そしてデスマーミーガイ、ジェノサイドジョーカーを「ホール！シユ
テルンブラウクリューガーのスキル、ソウルにブラウクリューガー
があるときパワー+1000だ！」

シユテルンブラウクリューガーのパワーが11000となる。

「デスマーミーガイのブーストでジェノサイドジョーカーでリバイ
スドラゴンをアタック！！」

「針剣士でガード」

「シユテルンブラウクリューガーでアタック！！」

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト…グレード3だからテスアーミーがイガスタンンド、そしてセカンド…ターンエンド」

遊馬のダメージが3となり、カムイのチェックではグレード3しかこなかつた。

「俺のターン！リバイスドライブゴンでジエノサイドジョーカーをアタック！」

「ブラウパンツァー、オアシスガールでガード」

「ホープでアタック！！」

「ノーガード」

「ツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットスタンンドトリガーリバイスドライブゴンをスタンド！パワー+5000」

「ダメージチェック……」

「リバイスドライブゴンでアタック！！」

カムイのダメージが4となりピンチに陥る。

（何とか流れを変えなきや）

「俺様のターン！ジエノサイドジョーカーをホール！そして2体のジエノサイドジョーカーのスキル！カウンターブラスト、パワー+

4000」

「ジェノサイドジョーカーのパワーが14000となる。

「オアシスガールのブースト、ジェノサイドジョーカーでリバイスドラゴンをアタック！！」

「ノーガード」

「ダンシングウルフのブースト、シュテルンブラウクリューガーでアタック！！ツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットヒートリガー！効果はジェノサイドジョーカーに、ダメージを1枚回復！」

遊馬のダメージチェックにトリガーはなかつた。

「デスマーミーガイのブースト、ジェノサイドジョーカーでアタック！！」

遊馬のダメージが4に、カムイのダメージが3となり逆転する。

「俺のターン！かつとビングだー！！俺！！カオスエクシーズチエンジ！混沌を光に代える使者！CNO-39希望皇ホープレイ！そしてゼアルのカウンターブラスト、デッキからZWを手札に加える！」

遊馬はデッキからカードを1枚手札に加えコールした。

「ZW一角獸皇槍！このユニットがエクシーズユニットをブーストしたときエクシーズユニットにパワー+4000だ！そしてホープレイのスキル！ダメージが4以上のとき、ソウルブラスト2とカウ

ンターブラスト�で相手ユニット1体のパワーを1000下げ、ホープレイのパワーを1000上げる！さらに2回発動だ！」

ホープレイのパワーは11000、よつてパワー14000となり対するシユテルンブラウクリューガーは8000になつてしまつた。

「そんな……」

「さらに俺はZW一角獣皇槍をコール！このユニットがアタックしたとき、ヴァンガードがホープレイならダメージを1枚表にする！さらにミラーメール、ガンバラナイトをコール！そしてミラーメールでアタック！！」

ミラーメールのパワーは8000、ガンバラナイトのパワーも8000なのでパワーは16000である。

「ノーガード、ダメージチェック……」

トリガーは出なかつた。

「ZW一角獣皇槍のブースト！！ホープレイでアタック！！」

ZW一角獣皇槍のパワーは6000、そしてスキルもあわせてホープレイのパワーは24000となつた。

「ウォールボーグ、タフボーグ、ストームでガード！！（トリガーさえなれば耐えられる……）

「かつとビングだー！！ツインドライブ！ファースト…セカンド…ゲットクリティカルトリガー！効果は全てホープレイに！」

「うう…ダメージチョック…負けた…」

「俺の勝ちだ…！」

『君にしては頑張つたじゃないか…』

「アストラル今頃出でてきたのかよ、お前がいなくとも俺は勝つたぜ」

「

遊馬が突如出でてきたアストラルと会話をしていると

「次は絶対俺様が勝つからな…！」

「おう 楽しみにしてるぜー！」

いつもしてQ4と遊戯たちのファイトは幕を閉じたのである。

希望▽Sバトロイド（後書き）

次回、遊戯たちがアカデミアに入学します！

校長登場

「さう言えば十代たちってこれからどうするの？」

「うーん……どうするっていつもなあ遊星？」

アイチに今後のことを見かれて困った十代は遊星に助けを求める。

「敵がないからなんとも、それに俺らは住む場所も無い」

「あつ…………」「」

「どあすんだよ~……」

遊星の言葉に少々元気を失う遊戯、十代、遊馬の3人。

遊馬が座り込んで弱音を吐くと

「さう言えば櫂、あんた個々の校長と知り合ってよね?あんたが頼めば?ここ寮制なんだから」

ミサキが櫂の方を向きながら喋る。

「ホントだがめんどくさい、お前達でどうとかしら……」

「ホントだがめんどくさい、お前達でどうとかしら……」

櫂が冷たくいい放つとアイチが顔を真っ青にしていた。

「どうした? アイチ……」

「僕たち今日ここ入学式なんじゃ……」

「……あ……」

回りにいた野次馬含めて全員が絶叫した。

なんせここにいる人全員、入学式をサボったのだから。

皆が焦り出していると

「その予定だつたんだけど誰も来ないから後回しにしたんだ。それに物凄いファイトを見せられたからな」

そこには見知らぬ3人が立っていた。
生徒とは違う制服を着てるので教師だといつゝとはわかるのだが
あまりにも若いので信じられなかつた。

皆が不思議な顔をしていると

「權、紹介してやつてくれよ。昔からの仲だろ?」

先程話しかけてきた青年が話した。

「權君知り合いなの?」

「ああ……」いつは佐野シゲル、ここの校長だよ……

「…………えつ? こんなに若いの?」

「信じられないか……だが俺は正真正銘の校長だよ

校長が話し一拍空いてから

「…………ええーーー…………」

「ここ」の校長になる予定だつたオヤジがちょっと体調崩しちまってできなくなつたから一人息子の俺が代わりにやることになつたんだよ

「

シゲルはどうして校長になつたのか教えてくれた。

そしてアイチたちと遊戯たちは何とか遊戯たちを入学させてもらえないかシゲルに頼んだ。

「入学させてやってもいいが条件がある」

「…………条件?」

「ああ……俺の側近の永本コウヘイと中山ミズキ、この2人の内1人とお前たち4人の内1人が戦つて勝てたら入学させてやるよ

「その条件飲むぜ!ー!ー!」

遊戯が力強く叫んだ。

「楽しみだ! 時間は10分後だ!」

遊戯たちは作戦会議に入る。

その横でアイチが櫂に質問していた。

「櫂君、校長って強いの？」

「校長もあの側近もかなり強い……昔小セことときに元気だったことがあるからな」

「皆知り合いなのー？」

「ああ……」

（あの人たちどんなファイトするのかな……）

10分がたち、遊戯たちの方からは遊星が、そして教師組からは永本コウヘイがファイトすることに決まった。

「俺の名前は不動遊星だ！」

「俺は永本コウヘイ、このアカデミアの生物学の教師だ」

「校長もそうだが、あんたも若いな」

「そりゃ皆一九歳だからな、けどちゃんと教師の免許は持ってるぜ

」

「ウヘイは首からぶら下げる免許を見せた。

「まあこんな話はあとでも出るから今はこいつに集中しようぜ」

「ああ……」

「「スタンドアップ、ヴァンガード！！」」

校長登場（後書き）

この3人は作者オリジナルキャラです。

後半でなかなか鍵になってくるキャラなので温かく見守つてやつて
ください m(—)m

未確認生物使いの青年

「君はUMAって知ってるかい？」

突如コウヘイが遊星に話しかけてきた。

「未確認生物のことだろ？ それがどうした…」

「僕はUMAのことが好きすぎて、UMAをデッキにしたんだ

コウヘイは持っていたデッキを見せる。

「だから君たちと同じオリジナルなのさ まあ早く戦おつ

「ああ！俺はスターライトロードにライド！」

「僕はアノマロケリスにライド！」

コウヘイのライドしたユニットは 甲羅の前方からツノのようなものが突き出たカメらしきものだった。

「なんだそのカメ」

「アマノロケリスといつて白亜紀に生息していた陸生のカメだよ！ ？知らないの？」

遊星は知らないといったような素振りを見せた。

それを見たコウヘイは信じられないという感じで説明を始めた。

「また始まつたよ……「ウヘイの悪い癖……」

シゲルとミズキは少々呆れた様子でその光景を見ていた。

「「ウヘイ、その辺で辞めとかないと給料減らすからな～」

シゲルに驚かれて渋々説明を止めるウヘイ。

「授業で教えるか…僕の先攻、ドローー僕はコーランテリウムニア
イドするよー」

ナマケモノとよく似た生物がそこにいた。

「僕はターン終」

「俺のターン！俺はスピードウォリアーにライド！そしてスピード
ウォリアーのスキルでパワーを2倍に！そしてスピードウォリアー
でアタック」

スピードウォリアーのアタックがヒットしてウヘイのダメージが
1になる。

「うじて遊星たちの入学をかけたファイトが始まるのだった。

未確認生物使いの青年（後書き）

オリジナルキャラの元となつた人物の提案で今回この様な「テッキ」を作らせていただきました。

次回この「ヒマテッキ」を思いつき使いつますので楽しみにしてもらえたう幸いです

U M A V S 星の絆 決着

「僕のターンだね、ドロー！僕はメガロドンにライド！」

16mほどある巨大なサメが現れた。

「後衛にチャンプをコール」

今度は見た目は蛇のような生物が「コールされた。

「チャンプのブースト、メガロドンでアタック！」

メガロドンのパワーは10000、チャンプのパワーは6000なのでトータル16000となる。

「ノーガード」

トリガーはなく、遊星のダメージが1となる。

「俺のターン！俺はジャンクシンクロンにライド！そしてチューングサポートーをコール！チューニングサポートーにジャンクシンクロンをチューニング！」

ジャンクシンクロンが光の輪となりその光の輪がチューニングサポートーを包む。

「集いし星が、新たな力となる！光さす道となれ！シンクロライド！ジャンクウォリアー！」

「あれがシンクロライドか…」

ミズキがシンクロライドに関心している。

（あれがこちらでも出来たら凄いことになるだろ？）

「チューイングサポートーのスキル！カードを一枚ドロー…さらにジャンクウォリアーのスキル！パワー + 2000」

ジャンクウォリアーはソウルのジャンク、またはウォリアーと名のつくユニット1体につきパワー + 1000。ソウルにジャンクシンクロントスピードウォリアーがあることでパワーが2000上がり、12000となる。

「ジャンクウォリアーでアタック！スクラップフィスト…！」

「ノーガード」

「ドライブチェック……クリティカルトリガー…」

「ウヘイのダメージが今の攻撃で3となる。

「なかなかやるね、けど僕のCOMAは簡単にやられなによ」

「「ウヘイ調子にのって下手しなきや良いけど……」

シゲルとミズキがウヘイの心配をしていると

「僕のターン！誰でも知ってる僕のお気に入り、ネッシーにライド

！ネッシーのスキル！ネッシーはリアガードのチャンプ、クッシー、メンフレーをソウルに置く。そしてその数×2000パワーが上がり、4枚以上ならクリティカル+1だ！凄いだろ 」

「 やつぱりスつたなアイツ…………」

シゲルとミズキは呆れ果てていた。

そもそものはず、ソウルにはチャンプしかないのでネッシーの力を活かしきれてないのである。

「 あ！？間違えた！…………」

それからコウヘイは遊星の攻撃を受けて遊星に結局敗北してしまったのである。

こうして遊星たちの入学が決まった。

U M A V S 星の絆 決着（後書き）

最近、自動車の教習が忙しすぎて更新できていませんでした。

今日からまた更新していくと思しますのでよろしくお願ひいたします。

コウヘイ…………モデルの人物もこの様なミスをよくするんですね…………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2376z/>

カードファイトヴァンガード～イメージと絆を繋ぐ物語～
2011年12月28日22時45分発行